

海竜王寺の発掘(2)

平城宮跡発掘調査部

1970年7月、奈良市法華寺町の海竜王寺旧境内にある、国指定建造物の防災工事が行なわれた。消火栓導水管埋設にともない、調査部は奈良県教育委員会に協力して、立会い調査をおこなった。

海竜王寺では、奈良県文化財保存事務所による重要文化財西金堂解体修理工事の際、中金堂、西金堂、北・西面回廊の旧基壇が発見され、また、地表上に東金堂基壇北面凝灰岩地覆石、中金堂正面階段凝灰岩地覆石が露出している。今回の掘削工事は伽藍中心部におよび、検出された主な遺構は、中門、南・東回廊、中金堂背面敷石、東・西僧房などである。

中門 表土直下から、中門の北面階段凝灰岩最下段々石および、北面基壇の凝灰岩地覆石を検出した。階段の東側では、すでに地覆石は失なわれていた。

東・南面回廊 重要文化財経蔵北方のトレンチで、回廊東南角の入隅部基壇の凝灰岩地覆石を検出した。南面回廊の地覆石の残存状態は悪かったが、東回廊のものは(77.0cm×47.0cm×9.0cm)残りが良く上面には羽目石の仕口があり、また、入隅から東へぬける水抜溝の凝

第1図 海竜王寺旧境内地形実測図・遺構配置図

灰岩側石および底石が検出された。

先年発見した、北・西面の回廊を合せ考えると、回廊基壇の全長は、内法東西長47.65m、南北18.10mとなる。東西長さと南北長さの比は2.6:1となり、非常に横に細長いものとなる。

第2図 海竜王寺出土土器

金堂背面遺構 現本堂は、中金堂跡のうゑに建て

られており、本堂の背面をとる幅40cmのトレンチ

で玉石敷を検出した。玉石敷は東西に広く24.5cmの範囲に広がっている。松本重信住職によれば、南北幅はもっと広いといわれ、中金堂の雨落溝ではなく、中金堂背面の敷石と考えられる。

また、想定伽藍中軸線から東へ14.5mの位置で玉石敷がきれ、凝灰岩切石（地覆石か？）があり、さらに東に基壇土がわずかに残存しているところから、何らかの建物があったものとみられる。これは古図にみえる東僧房に相当する建物であろうか。

その他の遺構 西金堂北側のトレンチで凝灰岩礎石を1個検出した。これを北面回廊の礎石とするのは、回廊基壇内側地覆石から礎石までの心々距離が6.9mと大きくなりすぎる。あるいは、先に検出した東側建物（東僧房）と対称の位置にある建物（西僧房か？）の礎石であろうか。

西金堂東側のトレンチで3カ所、本堂北側のトレンチで2カ所に掘立柱の掘方を確認した。いずれも、地山から掘り込まれているが、寺との前後関係はわからない。

調査で出土した遺物は、少量であるが、瓦と土器がある。瓦類のうち、奈良時代のものは、平城宮軒丸瓦6282型式、軒平瓦6671・6721型式と同型式で、同範である。その他は、室町時代から江戸時代にかけてのものが数点あるだけである。当寺旧境内からは、いままでに飛鳥時代の軒丸瓦をはじめ重弧文軒平瓦などが発見されている。奈良時代のものは6282・6721の

両型式が多量に発見されている。土器は8世紀後半の杯が2点ある。1は口径17.2cm、高さ3.5cm、外傾してひらく口縁部を有し、底は平底である。口縁端部は内側に1条の沈線がめぐる。底部外面はていねいにヘラケズリし、さらに横ナデを行なっている。2は高台のつく杯である。口径20.8cm、高さ3.1cmである。外傾してひらく口縁部を有し、口縁部と底部の境は明瞭な稜をなす。底部のやや内側に輪状の高台がつく。底部外面はヘラケズリをしている。胎土は1・2とも灰白色を呈し、1は砂粒を含み、2は砂粒をほとんど含まない。

第3図 海竜王寺中門基壇の地覆石と階段々石

（森 郁夫・村上 一）